

インタビュー

「地域の大人に社会課題を認識させ行動を起こさせるためには、どのような学習の仕掛けが必要か」

JaLoGoMaプログラム・ディレクター

ポートランド州立大学(PSU)

ハットフィールド大学院 行政学部 学部長・教授

パブリック・サービス研究・実践センター副所長 西芝雅美さんに聞く

聞き手：放送大学教授 岩崎久美子 本誌編集部 近藤真司（オンライン取材 6月10日）

8回目では、「地域マッチングの持続可能性 地域と生涯活躍編」を特集しました。

その座談会の中でパネリスト

のひとり、吉田敦也さん（ポートランド州立大学パブリック・サービス研究実践センター）が、全米で住みやすいまちとして世界の注目を集めてきたオレゴン州ポートランドの魅力を紹介していただきました。その後、たまたま、19年間行つてきました、住民主体のまちづくり人材育成プログラム「JaLoGoMa」を知る機会を得ました。

このまちづくり人材育成プロ

グラムの魅力について、岩崎久美子「JaLoGoMa」に参加の経験のある放送大学教授岩崎久美子さんに同席いただき、そのプログラムの狙い、「共生」という言葉の持つ意味、さらに「大人の学び」との関係、どのように行動につなげていくのか等、インタビューを行いました。（本誌編集長 近藤真司）

● まちづくり人材育成プログラム「JaLoGoMa（ジャロガマ）」とは

近藤…まずポートランドのまちの魅力と、簡単にポートラ

ンドとのつながりをご紹介

ただけますでしょうか。

西芝…ポートランドのまちの魅

力は、ポートランドに住んでい

る人たちが、長年こういうまち

にしたいということを、明確に

意思表示をしてきたことにその

源があると思います。その想い

の実現のための努力を積み重ね

てきた結果、今、いろんな人に

「ポートランドはいいまちだね」

と、言われるようになつたのだ

と思います。

近藤…まさに、自分たちの住みたいまちを自分たちで関わ
りながらつくっていくこと
だと思います。それでは、
ポートランド州立大学（以下、
PSU）のまちづくり人材育成
プログラム JaLo Go Ma
and Management Training

ポートランド州立大学 (PSU)

アメリカ北西部オレゴン州最大の都市、ポートランド市に立地する州立大学。

1990年代初等に「知識をもって市に貢献せよ」(Let Knowledge Serve the City) というモットーを採択。「地域に根ざした」大学を目指し、学習プログラムを提供し、住民主体の自治を推進し、行政を含む社会の改革に主体的に関わる人材育成のためイノベーティブな学習支援技法を取り入れ、全米でもその取り組みは評価されている。

PSUは、キャリア支援、学び直しを目指す社会人教育の機会も多面的に提供している。また、ポートランドの持続可能なまちづくりが注目され、アメリカ国内や海外から持続可能なまちづくりの事例を学びたい訪問者をスタディツアーの形式で受け入れている。

クローズアップ：



ポートランド州立大学(PSU)
ハットフィールド大学院 行政学部 学
部長・教授
パブリック・サービス研究・実践セン
ター副所長 西芝雅美さん
<プロフィール>

大阪大学文学部英語学科卒業。1991年に渡米。1998年にPSUのコミュニケーション学で修士号、2003年にPSUの行政・公共管理学で博士号を取得。専門は市民参加、米国地方政府研究、手法、多文化共生、異文化間コミュニケーション等。主な著書に『Culturally mindful communication: Essential skills for public and nonprofit professionals』、日英対訳『大学が地域の課題を解決する: ポートランド州立大学のコミュニティ・ベースド・ラーニングに学ぶ』等がある。

西芝.. 2004年に、東京財團主催で、PSUと早稲田大学の協働で市区町村職員研修プログラムが発足しました。全国の市区町村から市長推薦を受けた12～13人ぐらいの選りすぐりの中堅職員に早稲田大学の大学院で勉強してもらいました。その後PSUで7週間の研修を受けるというプログラムでした。

2009年から、より多くの自治体職員の参加を図りたいという財団の意向で、早稲

田大学の部分を切り離して、田大学の部分を切り離して、
Program) プログラムについて
簡単にお話しいただければと思
います。

西芝.. 2016年で財団と、ポートランドでの1週間
の海外研修プログラムという
形態に変わりました。

その後、2016年で財団の週末学校プログラムは打ち切りとなつたため、2017年からはPSUが独自で提供する現在の人材育成プログラムJaLoGoMaを開催しています。この際、自治体の職員に限らず、まちづくりに関心のある人は誰でも参加できるようになります。

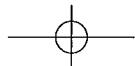
岩崎.. 私としてはポートランド大学が地域に対しても技術的なノウハウを提供していることと、大学と市民との関係性が確立していることに驚きました。JaLoGoMaやCBL(コミュニティ・ベースド・ラーニング)のセミナーに参加し、まちづくりの手法を学べたことは成人学習の方法を考える上でもとても有益でした。

- 共生社会を実現するまでのまちづくりへ
- 近藤.. JaLoGoMaの今年の夏のプログラムのポイントを教えていただければと思います。
- 西芝.. 共生社会を実現する上でのまちづくりへの取り組み

コミュニケーション・ベースド・ラーニング (CBL)

PSUがイノベティブな学習支援技法として採用しているのが、コミュニケーション・ベースド・ラーニング。この教授法は学生と教員がコミュニケーションと積極的に関わり、学習プロセスの中でコミュニケーションの課題解決に携わる事で学びを確立することを目指すもの。

CBLの定義は「学問的な内容に対する学生の理解力と応用力を高めるために、系統だって学生が地域社会問題に取り組む講座。例として、CBLの機会が授業の一環として組み込まれている講座、フィールド体験学習（実習「プラクティカム」や実務研修「インターンシップ」を含む）、キャップストーン、およびその他のコミュニケーション・エンゲージメント・プロジェクトおよび研究プロジェクトなどが該当する」(Portland State University,2021)



方がどういものなかといふことを今年のテーマに設定しました。ポートランドの事例も含めて包括的に考えるプログラムにしたいと思います。

2020年に黒人のジョージ・フロイドさんが警察官の暴力で亡くなつたということがきっかけとなり全米で人種問題に対してより一層関心が高まりました。ポートランドでもどうすれば人種も含めて、多様なバックグラウンドを持つ人たちがうまく共生し、恩恵を共有できる社会をつくり上げていけるかという事がまたづくりの中でも重要な課題として注目されています。

日本語でのテーマ設定では「共生社会」という概念でより包括的に捉えていますが、ポートランドでの取り組みではEquity（公正性）をキーワードとし、Equityのある社会、Equityのあるまちをつくるためのアプローチが特に重視されています。

方針などを今年のテーマに設定しました。ポートランドの事例も含めて包括的に考えるプログラムにしたいと思います。

ポートランドでもまだ試行錯誤中ではあるのですが、その試行錯誤のプロセスも含めてポートランドで人種問題や、まちづくりをどうしているのか、あるいは人種だけではなくて、障害者の人たちが健常者と共生できる社会をどのようにつくりあげようとしているのか、あるいはそういう目に見える違いを超えて、今まで声を出せなかつた人たちの声をどのように吸い上げるのか、そういういろいろな大きな課題がいっぱいあります。

そういう課題を中心にお話を聞いて、日本から参加していただいたランドの方々から話を聞いて、日本からも重要な課題を上げていけるかという事がまたづくりの中でも重要な課題として注目されています。

まちづくり人材育成プログラム (Japanese Local Governance and Management (JaLoGo Ma) Program) について

2004年に発足し2008年までは、東京財團主催でポートランド州立大学パブリック・サービス研究・実践センター（CPS）と、早稲田大学公共経営大学院の主管による「市区町村職員国内外研修プログラム」として開催。プログラム内容は早稲田大学公共経営大学院での講義受講と、7週間のポートランドでの体験学習からなる。

2009年から2016年は、東京財團主催の「東京財團週末学校」として開催。参加自治体職員数を大幅に増やし、東京財團での週末での講座受講とポートランドでの夏の1週間プログラムとなつた。

東京財團が2016年でプログラムを打ち切り、その後、2017年からCPSが独自にまちづくり人材育成プログラム (Japanese Local Governance and Management (JaLoGoMa) Program) を開催。メインテーマを「住民主体のまちづくり」とし、自治体職員に限らずまちづくりに関心のある人がだれでも参加できるプログラムとして、毎夏、ポートランドでの1週間の滞在プログラムとして開催。

2020年にコロナ禍で、日本からポートランドへの移動が不可能となったため、プログラムをオンライン型のE-JaLoGoMaに切り替えて開催。参加者はオンラインのビデオ教材や文献資料で事前学習をし、セッション当日はオンライン上でポートランドの講師陣とリアルタイムでディスカッションをする形式で開催された。同年はセッション数全4回で60名が受講。翌2021年は同じくオンライン形式で、セッションを全3回で開催し、25名が受講した。

本年2022年は、7~8月にセッション数全4回で行われた。

2004年からこれまでのJaLoGoMa受講者は、500名を超える。

(参考資料：放送大学教材「生涯学習支援の理論と実践」赤尾勝己・吉田敦也：放送大学客員教授著より)

クローズアップ：

JaLoGoMaの5つのキーポイント

- 1、住民主体となるまちづくりを行っていくための基本原則
- 2、自分の立ち位置からリーダーシップを取る要素
- 3、イノベーティブ（革新的）な課題解決方法を見つけて出す
- 4、パートナーシップを組むためのスキル
- 5、「公正性」の視点をもってまちづくりを考える

JaLoGoMaで学べるまちづくりの5つのポイントは、①住民主体となるまちづくりを行っていくための基本原則、②自分の立ち位置からリーダーシップを取り要素、③イノベーティブ（革新的）な課題解決方法を見つけて出す、④パートナーシップを組むためのスキル、⑤「公正性」の視点をもってまちづくりを考えます。

西芝先生のお話でもあつたと思ひます。特に西芝先生がこのポイントというようなものがあれば、この5つの中からエッセンス的なことをお話しただければと思ひます。

トナーシップを組むためのスキル、⑤「公正性」の視点をもつてまちづくりを考えるです。どれも非常に大事ですね。特に西芝先生がこのポイントというようなものがあれば、この5つの中からエッセンス的なことをお話しただければと思ひます。

トナーシップを組むためのスキル、⑤「公正性」の視点をもつてまちづくりを考えるです。どれも非常に大事ですね。特に西芝先生がこの5つの中からエッセンス的なことをお話しただければと思ひます。

トナーシップを組むためのスキル、⑤「公正性」の視点をもつてまちづくりを考えるです。どれも非常に大事ですね。特に西芝先生がこの5つの中からエッセンス的なことをお話しただければと思ひます。

西芝…共生社会と公正性にはオーバーラップがあります。ですので、今年のテーマは、この5つのテーマの中の公正性にフォーカスをします。

他の4つの点も全部大事なんですが、私たちのプログラムの中でぜひ皆さんに体感してもらいたいなと思っています。

西芝…誰もがリーダーになれる

西芝…誰もがリーダーになれるのが、誰もがそれぞれに自分の立場の中でリーダーになれ、主体性をもつて、リーダーシップを取れるということです。

西芝…リーダーというのは、組織

西芝…リーダーになれる

西芝…失敗することを恐れない土壤

西芝…失敗を恐れていたのではやっぱり従来の安全な方法しか取れなくなるので、ポートランドの人たちのやり方を皆さんに見ていただくと、失敗しても大丈夫だよというその辺の様子を分かってもらえるの

それだけではない。皆さんそれが、それぞれの立場で、学生さんであれば、学生という立場からどうやつてリーダーシップを取れるのかという

西芝…ポートランドの人たちはイノベーティブだと言われています。なぜ、ポートランドの人たちがイノベーティブなのかという点ですが、今までのJaLoGoMaに参加された方々のコメントを聞いていても思うのですが、失敗することを恐れない、あるいは失敗してそれを周りがちゃんと受け入れる。失敗したから駄目ということではなくて、失敗するの当たり前でしょ

う。そのような土壤があつてこそ、イノベーションが生まれると思います。

失敗を恐れていたのではや

つぱり従来の安全な方法しか

見えないとき、イノベーテ

ィブなものが出していく

いなかないところもあると思

います。③のイノベーティ

ブな課題解決方法、これにつ

いてはいかがでしょうか。

かなと思っています。

近藤..非常に大事な部分だと思います。日本では出る杭は打たれるみたいなことがあるのですが、やっぱりそれを周りで支えていく土壤ですね。失敗ができる環境というのは非常に大事だと思っています。

●パートナーシップが重要

近藤..それから④番目のパートナーシップですね。これも日本の社会では難しいところですが、この辺のポイントがあればお願いします。

西芝..ポートランドのいろんな事例を紹介していく中で、どの事例にもいろんなパートナーシップがあるということが解ります。例えば、草の根レベルの住民グループが立ち上げたプロジェクトのプロセスを見ていると、彼らがいろんな行政と対等なパートナーとして話をします。お願いするのではなくて。あるいは大学をパートナーとして仲間に入

れる。そういういろんなパートナーシップを大事にしながらまちづくりをやっているというプロセスが、こちらの事例では見られます。

Jalo GoMaのアメリカ人スタッフで、ずっと事例の紹介をやつてもらっている方々みんな、大事なのはパートナーシップだといいます。自分たちだけで何かをやろうとしてもできるものではない。だから誰とパートナーシップを組むと自分たちのやりたいことができるのかを考える事が大事だと。その辺のアプローチをJalo Go Maで、ぜひ皆さんに見てもらいたいなと思います。

●Partnershipが重要

近藤..パートナーシップある(公平性)とEquality(公平性)は違う

近藤..パートナーシップある

近藤..パートナーシップある

域に帰れば1人の住民であるという視点に戻って、いろんなことを進めていくのが大事だと思います。

日本の大学は一部、大学開

放、オープンユニバーシティ

ーもやっていますが、本格的に大学が地域の一員になっているところはあまりないよう

な感じもします。

●Equity(公正性)とEquality(公正性)は違う

近藤..それでは、本日のイン

タビューのメインテーマである「地域の大人に社会課題を認識させ、行動起こさせるためにはどのような学習の仕掛けが必要か」というところ

を日本の土壤に移し一般の市民たちに浸透させるためには、どのように日本の人たちの心にEquityの理念を根付かせていくことができるのでしょうか。

西芝..Equityの概念、公正性と公平性の違いがなかなか一般の人々には解りづらいという

岩崎..岩崎先生からお願いした

ことはアメリカでも日本でも同じだと思います。解りやすい

日本で日本が日本の社会を見たときに、

日本の社会が良くなるためにこのEquityという考え方や重要な理念を、私たちはどのように形で学んでいったらいいのでしょうか。

文化や価値観として大事だ

ということは分かっていても、日本ではEquityという言葉に対する具体的な行動は、学んできていよいよ気がします。

例えばポートランドのやり方

を日本の土壤に移し一般の市

民たちに浸透させるためには、

どのように日本の人たちの心

にEquityの理念を根付かせていくことができるのでしょうか。

西芝..Equityの概念、公正性と公平性の違いがなかなか一般の人々には解りづらいという

のはアメリカでも日本でも同じだと思います。解りやすい

のは公平性。誰をも対等に扱えばそれで公平、となる。行政は公のアプローチとして差別をせず、みんなを対等に扱わなきやいけない、それが公平で正当なアプローチだとい



街中のインタビュー

う考え方が一般的に浸透していると思います。

それはアメリカでも同様で、今まで公平性が大事だったのですが、少し立ち止まって見てみると、公平にサービスを提供すれば、お金持ちの人には既にメリットを受けている

のでさらに恩恵を被る。公平に貧しい地域に住む人たちもサービスを受けられるけれども、お金持ちの人たちが住んでいる地域と貧しい人たちが住んでいる地域の差は縮まらない。それが、本当にみんなが共生できる、みんなが楽し

いと思えるまちなのかといいうやつて埋めるのかというところを考えながら、行政のサービスを考える。あるいは運営のアプローチを考えると、というのが公正性だと思うのです。

西芝..教育の世界でも70年代、80年代には公正性や社会正義が理念として言られてきましたが、90年代以降、人的資源開発を目的とする現実的で効率的な方向に重点がシフトしてきているように感じられます。

</

●既存の考え方を覆すような大人の学び

岩崎…ありがとうございます。次に大人の学びとについてお話を伺いたいと思います。

私はJaLoGoMaに参加して、日本人の参加者にとって大人の学習機会として、大変良く企画され工夫されていると感じました。異なる経験を有する多様な職種の方たちとひとつのテーマで語り合う場をオンライン上で形成し、上手にスタッフがファシリテートしている、これはまさしく社会教育の発展的形態と思いました。

西芝先生は、ポートランド州立大学では、地域の人たちに社会課題を意識化させるために、どのようなプログラムを提供しているしやいますか。

院は、公務員になりたい人、NPOで働きたい人たち、あるいは都市計画をやっている人たち等、ほとんどが社会人で理論と実践を両方学んでいます。実際にフィールドに出でて、地域の課題は何なのかともう一度を見極めるというのも分析力のひとつで、それをいろんな理論や文献などで学んだことをベースに解決方法を考えるというのがいわゆるコミュニティ・ベースド・ラーニングです。つまり、地域の課題を解決しながら学ぶというアプローチですね。

岩崎…コロナ禍の状況でJaLoGoMaにはオンラインでの参加でしたので、現地でコミュニケーションがどのように行われているのか知ることができず残念です。例えば、以前ポートランドで実施したJaLoGoMaで、現場に出て行くと参加者がどのように変わっていくのか、そばで見ていてお感じになる

ことはありましたか。例えば意識の上で変わり、さらに行なうべきが得られた」という事です。

JaLoGoMaでの学び、あるいは大人の学びというのは、単に事例を見て頭で分かるだけではなくて、いろんな新しい

動も変わったというような例などがあれば教えてください。

西芝：JaLoGoMaのプログラムのインパクトは個々の事例を見て何かを学ぶというより、トータルとして何か自分の考え方が変わった、見たいな処にあるのかもしれません。例えば、福岡県久山町の職員時代にこのプログラムを受講し、最近町長さんになられた西村勝さんという方がおられます。JaLoGoMaプログラムについてお話を伺う機会があつたのですが、お話しを聞く本人曰く、「JaLoGoMaのプログラムでは毎日いろんなところに行つて、いろんな話を聞いて、いろいろな話をして、いろんな人とディスカッションして、そこで『うーん』と考えています。

JaLoGoMaは、今は1週間なので、これを1週間でやるのは難しいのですが、できるだけそういう既存の考え方をしてしまうような場面に遭遇してしまって、悩んでもらつて、話し合いをしてもらつて、そのプロセスの中で考えてもいいたいと思います。

岩崎…そうすると、それまでJaLoGoMaの参加者が意識してこなかつたと思われる問題をあえて意識してもらえるような場面設定を、西芝先生やス



グループ振り返りの発表

タッフの方々が検討し提示するということでしょうか。

西芝..はい。そういったことを念頭に入れてプログラムづくりをしていますね。学びが事例の理解の中で生じる場合

もあれば、いろんな人たちと話をした後で、振り返りの時間の中で生じる場合もあります。私たちがディスカッションを進める場を設けるのも大事なので、事例の選択、振り返りをどういうふうにするか、プログラムをつくる上では全部を含めて考えています。

● 飲み会ではなく「ビアストーミング」

岩崎..プログラムを考える上で、振り返りの適切なタイミングはありますか。また、シリテーターとして介入するときのポイントはありますか。

西芝..ポイントかどうか解らないですけれども、JaLoGoMaの場合は、実際にレクチャーを受けたり、事例を見学したりした後、その日のうちに、ディスカッションをし、振り返りをする時間を必ず設けています。そして、1日置きく

もあれば、いろんな人たちと話をした後で、振り返りの時間の中で生じる場合もあります。私たちがディスカッションを進める場を設けるとい

うのも大事なので、事例の選択、振り返りをどういうふうにするか、プログラムをつくる上では全部を含めて考えています。

岩崎..プログラムとしてのフォーマルな場面だけではなくて、ビールを飲みながらディスカッションをするといったインフォーマルな場面が併せて有効だということでしょうか。

西芝..実は我々のスタッフの1人がインフォーマルな場面を、ビアストーミングと名付けました。当初、フォーマルな場面だとみんなかしこまつてしまつて自由な意見が出ないから、終わつてビール飲みながら話をするような場面を設けますとということで、飲み会みたいな感じでセットアップしました。そうすると飲み

会は飲み会になつてしまつて、

いわゆる振り返りにならない。

飲みながらきちんとディス

シリテートして振り返ります。また、ファシリテートしない、ビール飲みながらみんなとあ

でもないこうでもないと言

う中にスタッフが入つて、「で

も、こうなんじやない?」と

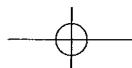
ディスカッションをする時間

も混ぜています。

岩崎..プロストーミングができるじゃないですか。『ビアストーミング』をしますと、やつぱり話し合いのやり方が違つてきますね。

西芝..きちんと今日学んだことを話す。飲み会だとダジャレを言つたりして楽しく時間を過ごすことがメインになりますが、ビアストーミングにすると、今日学んだことを話しましようみたいな感覚でみんな来ますね。

岩崎..ビアストーミングというネーミングも良いですが、その試み 자체も面白いですね。



自転車でポートランドの市内探索をした際のグループ写真

●自分の意見を言うトレーニングを

岩崎…最後に、アメリカから日本の社会を見て、行政や大学で、大人の人たちをより社

会的課題に目を向けさせ意識化させていこうとすると、日本で足りない点は何だと思われますか。アメリカと比較すると、日本の社会にどのような働き掛けをしていったらより良くなると思われますか。

西芝…難しいですね。やっぱり子どものときから、何が正しかったときに何が間違っているか自分が何を考えているかをきちんと話せるような教育をしておくことが大事だと思います。

過去に、日本人の大学院生2人ほどの指導教官をしたことがあるのですが、2人ともがアメリカの大学院で授業を受けて、「自分は何も考えていないわけじゃないんだけれども、先生に『あなたはどう思う?』と聞かれたときに、すぐ返事ができない。『アメリカ人の学生は、あなたはどう思う?』と聞かれると必ず自分がどう思うということをちや

んと言ふ」と言つていました。

彼らは、日本では自分の考え方を説明するよりも、正しい答えを出す事が大事だという

答えが出来る事はそれなりに大事だと思いますが、自分はどう考えているかという

ことをきちんと言えるトレーニングの場づくり。それを言つたからダメというのではなくて、「あなたはそういう考え方ね」ということを周りがちゃんと受けとめてあげるよう

な場づくり。その2つがないと社会問題に目を向けなさいと言つてもなかなか出来ないのではないかでしょうか?

岩崎…そういつた教育を受けた大人から構成されている日本

の社会を変えるために、大人になつてから西芝先生のおつしやるような教育を行うことは難しいでしょうか。

西芝…今からやるのであれば、全ての教育プロセスの中で、

そういうことができるような

トレーニングを、それぞれのレベルに合わせて考える必要があると思います。子どものときから積み上げていく事も大事ですが、大人になつてもそれなりに大人のやり取りの中で、あなたは何を考えているのか言えるトレーニングはやれると思います。

岩崎…それにには社会教育は有効だと思いますよ。

ただ、あなたは何を考えているか言いなさいと言つておきながら先生が「何だ、そんなばかなこと言つて」というように批判してしまつたらダメですけどね(笑)

岩崎…そうですね(笑)

近藤…最後に本質的なところで、まさに他人の意見をちゃんと聞いて、自分の意見を持つて発言するということに尽きるのではないかと思います。本当に今日は貴重な時間をありがとうございました。